

△たつみ 春秋抄▽

第五話

黄旗亭

(一) 東川崎町から海岸通り
大正九年十二月の暮れもおしつまつた二十日過ぎの事、東川崎町一丁目の鈴木商店の前におびただしい牛車馬車の運搬部隊が勢揃いした。予てから、元居留地の海岸通り十番地に構築中の新しい本店社屋が竣工したので今日は愈々その移転の日である。準備万端は既に前の日迄に手落ちなく仕上げ居り、当日は朝早くから若手の店員や見習員が中心になつて、ほこりにまみれ乍ら威勢よくキビ／＼と立ち廻る。庶務部の指令通りに少しの混乱もなく移転荷物の積み込みを終つて、予定通り昼過ぎにはあらまし海岸通りの新築の定められた各室へ落ち着く事が出来た。

代であつた。有名な「スエズを通過する日本貨物の半数以上が、S・Z・Kである」と世界に鳴り響いた其の時期である。それだけに仮事務所とは云い乍ら、歴史的な出来事と数々のエピソードと青春の哀歎を目まぐるしく積み重ねて来た思い出のこの殿堂であり此処への愛着はたやすく断ち切り難いものがあつた。誰もが、いざ、新居へ移転と定まつてからでも複雑な哀惜と感慨を抱いたもの様である。それはそれとして、さて、新しい社屋は三階建煉瓦造の外装を白亜のタイルで化粧した耐震耐火構造で堂々たる偉容である。一般に高層建築が普及して居ない頃のこととて充分過ぎる敷地にでんと構え十番地の全区副を占めた貫録は神戸一番の、否日本全国はおろか世界の端々迄号令するにふさわしい外観である。京町筋の大通りに面して東向きの中央部正面に大玄関があり南側横手は直ぐ海岸通りが東西に走つて居る。元町、栄町、海岸通りと三本のメインストリートは神戸の心臓部であり、之とは別に、瀧道の阪神電車終点を南へ下り東遊園地から浜側

に達する線と、西は元町、栄町一丁目からメリケン波止場に到る線の内側区域が元居留地である。古い時代の「外人専用居留地、治外法権指定地域」は遠い昔撤廃され新しい町名が制定されて居たがそれでも未だその頃は、居留地の何番館と云つた方が通りが早く、鈴木商店が移転した頃には日本商社も可なり多くさん社屋を構えて居た。本店はその元居留地の中心部の京町と海岸通りの角地に君臨したのである。正面玄関を這入ると左側に銀行の窓口に似た様な会計部出納係があり、右手に受付の大きなカウンターが出張つて居る。突き当りに其の時代には珍らしい方のエレベーターがあり、リノリウムを敷いた廊下が南北に通じて居る。私の所属する保険部は御大が横山正躬さんと、村井順三、小串牛蔵と私の四人世帯で本店では一番小さい部で一階の北の端の角つこの部屋があてがわれた。そして丁度その隣りの山側に面して通用門があり、金熊の人力車帳場が車を並べて居た。今ならさしづめ駐車場がガレージと云つた具合である。兎にも角にも忙しい一日二日があつと云う間に経つてしまった。

大正九年の末と云えば一頃の大戦景気も少し落ち着いて、人氣も次第に締り加減になり経財界も稍緊張気味ではまだ、鈴木商店の実力は微動だもせず、漸く最盛期に蓄積した財力を生産方面に振り向け、工場の新増設、新分野の開拓、子会社の設立等、多角経営の総合商社として断然重きをなした時期である。金子さんの天賦の炯眼と飽く事を知らぬ事業慾は、益々磨をかけ貿易と生産とを降魔の利剣としてふりかざし、ハツタと天下を睥睨した風貌はさながら阿修羅王か不動明王を思わせる如くであつた。

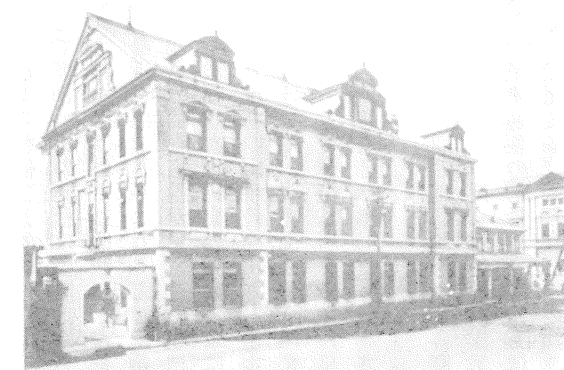
まして寄宿舎は帰省者でぐんと淋しくなつて居るので時帰る足取りは必ずしもいそ／＼とはして居らず街の雑沓にまぎれ込んで除夜のひとときを過ぎた。そして新年を迎えたのであつた。

元日は年賀の祝賀式を垂米三俱樂部で美々しく行われるのが近年の恒例になつて居たが今年のお正月には西川支配人のお姿がない、昨年の下期から森繁郎支配人が一人で何から何まで指図を取られ決裁を下して本店の運営を切り廻され大変な重責を

遂行して来られた、新しい年の興望を荷つて年賀の席にお着きになつたが、その重役席に西川さんが見えないのが新しい悲しみとやるせない失望を再び思い起させるのであつた。お家様も御主人も金子さんも柳田さんも心なしかぼつかり空いた心の空席をそれとはなく意識の底に秘めて居られる様に思えた。年賀式の風景は且つて「たつみ」の宇治川夜話でふれた事があるので茲では重複をさける。

が續いた。ほんの仮のいたつきと聞かされて居たのにそれから僅かに六十日、五月十五日、忽然としてお亡くなりになつたのである。よもやと思つて居た鈴木商店の全部の人々はあまりの事に声も程驚愕した。胃潰瘍と云う今ならそう心配する程の事もない病気でしかも働き盛りの四十七歳と云うお歳では只もう天の無情を怨むしか他なかつた。鈴木商店の繁栄に一縷の陰影がきざしたとは神ならぬ誰が予想し得たであろう。西川さん、御健在なりせば鈴木商店の運命も亦違つた道を歩んで居たかも知れぬとは後年誰もが一度は口にした繰り言である。

じつと無言でお待ちするより他仕方がなかつた。時間にすればほんの数分の事であつたらうが私には可成り長い時間の様に思えた。しばらくして、フツと我に帰られた様な支配人は傍に小僧の私が居るのを見て急に気を取り直した様に机の上に目をやり書類を一通り見てから静に署名をして下さつた。そして何を思われたのか「一寸待て、」と云われてギャラリの机の上段の棚から何やら取り出して一言「たべ給え、」と言われて書類と一緒に下げて下さつた。私は訳が分らぬまま只頭を下げて、有難う御座いますと小声で云い乍ら恭々しく頂き物と書類を手引下つた。



▲本店（神戸市生田区東川崎町一丁目）

その年賀式もさる事ながら、新しい年に新しい社屋で清新の気の漲る中で馬首を揃えて仕事を始めるのに西川文蔵支配人に、この首途を見て頂けないのが何としても口惜しい限りである。西川さんは本店の大黒柱であつた。若き鈴木商店はよい意味での下剋上の場でありその一番よき理解者で一番の育ての親が西川さんである。大黒柱は多くの支柱に支えられて棟木や垂木や長押しをしつかと支え、家台骨をびくともさせなかつた。それが一本、思いもかけずに抜けてしまったのである。西川さんが亡くなられてから早半歳経つた。省れば大正九年の三月、やよいの空に春近しを思わせる頃、不図病を得られて宇治川の店にお姿の見えぬ日

移転する前の東川崎町時代の事、私は或る日支配人室で西川さんの横に直立して署名をお願いする書類を机の上に置いた。重要な約定書や金額の大きな小切手、手形等は支配人が直接署名される事になつて居り殆ど森支配人が書いて下さるのだが時には西川さんをお願いする事もある。その時、何うしてであろうか、西川さんはチラと私を一瞥されたまま一向に筆を持つて下さらない。何か深い思索にふけて居られた様な模様であつたが、私の様な見習員の分際ではおせき立てする等思いもよらず

岡清一秘書が一寸離れた机に居て其所で捺印をもらうのである。岡さんは「よかつたなア、」と云う様子を私を見てニツと微笑された。私は部屋に帰つて横山さんに暇取つた理由と、その為か何うかは分らないがこんな物を支配人から頂きましたと報告した。それは、その頃の神戸でもまだ余り行き渡つて居ない輸入物で高価なヴァンホーテンのチョコレートであつた。嗜好品の好きな西川さんは常にハバナの上等の葉巻とチョコレート類を身近に置いて居られた。私は物体なくて食べる気がしなかつ

だがそれよりも私ごときに心くばりをして下さったのが私には何時迄も忘れられなかった。私は西川さんを俄に身近に感じる様になった。鍵番と云う名の宿直当番が見習員の間に廻つて来る、本店終業後、大金庫に施錠して鍵を中山手の西川さんの本宅へお届けして、翌朝再びもらいに行くのである。病気で店をお休みになられてからもそれは一日も欠かさず続けられた。

元町五丁目間の踏切を越えて再度筋を真直ぐ登って行くと神戸海洋気象台の気象通報の信号旗が幾つものためいて見える。その直下の辺り、道路の西側の少し奥まった台地に西川さんの本宅があった。中山手七丁目七十番地と私の古いノートに書かれてある。表通りから十数間石畳の小路を入ると両側に深い植込みの生垣が続いて玄関に達する。玄関脇の左手にくぐり戸があり其処から庭石の多くさん見える広い枯山水の庭に行ける様になって居た。玄関の土間には凡そ五、六坪もあつた様に思う広い間取りで、式台の上の衝立のかけから京子奥様が出て来られて鍵の入った小さなトランクを受け取って下さる。上品な綺麗な人でお年は四十近くであつたろうか。私には近寄り

難い様な崇高な人に思えた。上のお嬢さんには滅多にお目にかかれなかつたが、その頃まだ小さい明子お嬢さんや一蔵さんは物珍らしげに声をかけて下さる様な事もあつた。そして定つた様にお茶菓子半紙に包んで御駄賃に下さるのは奥様のお役目、之は一つ話として永く語り伝えられた、——「子に生きて、」より——。春先の或るお天気の良い朝、私は思いがけず縁側のガラス戸を開けて椅子に腰を下して居られる和服姿の支配人を、くぐり戸の此方からお見かけした事があつた。私は丁寧に最敬礼をし、「御苦労さん」と云う意外にお元気なお声が返つて来た。それが私が見た支配人の最後のお姿であつた……。そんな取り止めもない事を飛びくりに思ひ出して居た或る日の事、東上中の新幹線の車の中で、柳田さんが「辰巳会の十五年記念事業の一つとして、西川文蔵さんの碑を建てたい」と私にお漏らしになつた。私は即座にそれはこの上ない結構な提案だと思ひそれから機会ある毎に役員諸氏の意向をただして見ると大変な反響を起して全員こぞつての賛意が湧き上つた。西川さんの面影を輯録した「脩竹余韻」や京子夫人の追憶集「子に

生きて」は今となつてはかけ替えのない無形財であり貴重な文献ではあるが、時が経てば段々と色が褪せて日々とうとくなり僅かな人々の手元で死蔵化して行くのは止むを得ない事である。そんな事を考え合せて、追谷のお墓とは別に、西川さんのお徳を偲ぶ碑が我々の手で建てる事が出来たら末代迄深い意義を残す事となる。西川さんが若し生きて居られたら、今年丁度、満百才になられる、先年、辰巳会が五十年忌を営んでから五年の日が経つた。今度の事は「生誕百年を卜して」の企画と云えない事もない。私の拙いこの一文が建碑企画のプロローグともなればこの上もない幸である。

(三) 海岸通り 人物往来

海岸通りへ移つてから、私には都合のよい事が沢山出来た。第一に、毎日使用に行かねばならぬ取引先がぐんと手近になつたので非常に労力が助つたのである。大きなチット・ブックと書類をかかえて一日数回飛び廻らねばならぬ先方が極く近距離に多くあるので大変楽になつた。居留地の中でも、フィンドレーリチャードソン、ワイマーク、亜米三マクドナルド、セールフレザー、ドッドウエル、デビスサンマース等は定期

便の様な行かねばならぬ先である。外国商館に行くと私の方が得意先側だからコピーを出してくれるのでそんな事も楽しみの一つであつた。フィンドレーの支配人米原定氏は特に可愛がつて下さつて用事に行く度に度々お菓子迄御馳走して下さいました。外人商館は午前十一時から一時半迄キチンと休憩をし四時になると一切閉じてしまうので時間を計つて用足をせねばならぬのが不自由であつた。銀行でも三時の閉店後は通用門から這入れるのに、外人はその点少しも融通がきかない。周辺の街並も美しいし電車の騒音も聞えず地域的にも便利になつてプラスの面は多かつたが、朝晩中山手の済美寮から通うのが大分遠くなつたのでマイナスもなくはなかつた。宿直の夜等は海岸通りを散歩する外人群に交つて異国情緒に浸つて見たり時としてはエトランゼエになつた様な錯覚を起すこともあつた。少年の日の感傷を持つた時代でもある。そんな屈託のない環境の中で有頂天になつて居た時、私の身辺に重大な変化が起きた。じわ／＼と押しよせる他人の余波の埒外に居て傍観の立場を取つて居ても時としてはその余波をもろに被らねばならぬ様な事がないとは限らぬ。

たつた四人の保険部で私に取つては大兄貴分に当る村井順三が突然横山さんに退店願ひを出したのであつた。横山さんは属望が篤かつただけに委しく事情を聞き極力慰留し客氣をいさめたりされたが結局は村井の願望を受け入れて止むなく退店を承認された。村井順三は今こそ富山市で押しも押されぬ鳥羽商店の社長として、又、ロータリークラブの支部長として富山市では知らぬ人となつてない位同市の商工界に重きをなし、齢も喜寿を越して尚かくしゃくとして居るが、その時は、二十三才の血の気の多い青年であつた。鈴木商店入社直後大連支店へ勤務して居たが肋膜炎を病んで内地へ還り保険部へ転入して来たのであつた。村井さんの事に付いては他日稿を改める事にする。只私は自分自身の感情から村井兄貴に店を退められては一番こたえるものだから執ようにその訳を突きつめた。かいつまんで書くとは去年退店した竹田儀一氏の跡を追うて協信洋行に走つたのである。之には色々事情もあり村井も随分思ひ切つて決心を固めたものだが、それはそれとして、茲では先づ、今は亡き竹田儀一氏に脚光を浴びてもらふ事にしよう。

同じ大正九年、宇治川時代の頃、直輪經理部の竹田儀一氏が突然店をやめられた。竹田さんの廿七歳の時である。氏は石川県大聖寺の生れ、大幡久一氏と同じ県立小松中学校を出て京都帝大に入り法学士弁理士の肩書きを持って鈴木商店に入店した。大幡さんよりは二ツ年下である。佐竹員治さんの直輪經理に所属されて居たが、あの歴史上有名な、金子さん、松方さんの船鉄交換の時始めから終り迄、金子さんの片腕となつて活躍し、金子さんの信望も一きわ篤つた。竹田さんは国際法規を専攻した異色の法学士で夢は国際上の検舞台に打つて出る事にあつたのである。金子さんの腰巾着を勤めて将来は必ずや店の中堅となる可く属目されて居た大物であつた。

豪放磊落、大胆不敵で色白の顔に髭の剃り跡が青々として見るからに好男子の国士型偉丈夫であつた。そのくせ、風采等は割合無頓着で、松方さんがオーブンの二頭立ての馬車で金子さんを迎えに来られると、金子さんの後から平気でノーネクタイのまま馬車に乗り込んで商工会議所の船鉄交換会議に出席した。松方さんの一分の隙もない英国紳士型の身なり、金子さんの毛皮オーバー姿、

それに竹田さんのノーネクタイ、と三人三様の取り合せが目をついた。その竹田さんが何故店をやめられたのか。二年半に渉る船鉄交換も金子さんの大成功裡に結末を迎えた。モリス大使やマクレガー事務官を中心に、祝杯と解散会が関係者一同を集めて盛大に宴を張つたが、その後、竹田さんの身辺は急に淋しい秋風が立ち出した。大きな仕事を完成した後の緊張感からの解放と昼夜を分かたぬ忙しさから一転暇を持てあます様な反動に直面した竹田さんは、じつとしては居られなくなつたのである。折も折、竹田さんの郷里の先輩が経営する栄町三丁目の協信洋行から、是非にと云う誘ひの手が延びて来た。前々から徳澤があるにはあつたのだが之も一つの運命の転機と云うのか竹田さんは意外にあつさり協信洋行へ行つてしまわれた。竹田さんの真意を押し計るよすがもな田さんの時、竹田さんは直輪經理部での部下、荻野正夫と私の兄貴村井順三を鈴木から引き抜いて連れて行つてしまわれたのである。村井は竹田さんより半年程おくれて協信洋行へ転進した。村井さんの居なくなつた保険部は火が消えた様に淋しくなつた。私は当座張り合いをなくし

て気落ちした様な毎日を送つた。そしてその上、夏には中兄の小串牛蔵が徴兵検査で土佐へ帰り甲種合格で来年一月には善通寺輜重兵第十一大隊へ入營する事が決定したのである。小串の兵隊検査は既定の事だから周章てる方がおかしいが横山一家の半分が變つてしまうので、流石の親分も両腕をもがれた様につくりして居られた。それからの保険部には目まぐるしい人事の出入りがあつた。木俣英吉、具島邦彦、廣岡一男、叶野健治、加藤輝威、吉田菊次郎、江本昇一、万戸金吾の諸氏である。私だけが焦げ付きで根を生やして居たが、不安定な人事には横山さんの気疲れも相当なものであつた。シャトル支店長、勝屋利秋氏が業務打ち合せの為一ヶ月程本店へ帰つて来られた事がある。その間、机を我が部へ置いて席を造られた。横山さんと大変親しく洋行帰り独得のあちら製の背広を着て靴音高く颯爽と闊歩して居られた。私には一寸の間だけであつたが又一つ仕事が増えたのである。そうこうする内に歳月はどん／＼経過して新館生活もすっかり板につき、白亜の内容も日増しに充実して行つたのであるが、戦後の不況は次第に日本全土を浸蝕し始

め、巷の風潮は一路頹廢へと傾斜して行くのを何うする事も出来なかった。

(四) 竹田儀一氏のプロフィール
私が二年間兵隊に行つて居る間に、鈴木商店にはどえらい事が起きてしまった。上空前の大旋風に襲われて前例のない大型悲運が鈴木の家台骨を根底から覆えしてしまつた。海岸通りへ移つてから僅に六年目の出来事である。無念と云えばこれほど腹立たしい無念口惜しさはたとえ様がない。終生忘れる事の出来ない昭和二年四月二日の事である。そして否応なしに雌伏数年の歳月が経つてしまつた。もう一度、竹田儀一氏の身辺にスポットを当てて見る。

昭和五、六年頃であつたと思う。或る日の事、大阪北の街頭で私は全く偶然に竹田さんと何年か振りにばつたりと出くわした。和服の着流しの上からカワウソの襟のマントを着た竹田さんは以前と少しも変わらずつくばらんで、話を聞くと私の職場とはほんの目と鼻の間の北区真砂町で弁護士を開業して居られると云うのである。真砂町は控訴院検察庁の近くで弁護士の集団地域である。昔の様に、いきなり「おお、君は順三(村井)とここに居た坊さんだつたな

ア、君の結襟服の姿をよく憶えて居るよ……」と云う調子である。

そんな事があつて半年程後、今度は南区の生玉前町へ法律事務所を移転したと云う通知が来た。続いて追いかける様に、「大阪市議員戦に打つて出る」からしかる可く頼むと云う知らせが来た。之が氏が政界に乗り出した第一歩である。そして見事に金的を射止められた。この前後の時期から氏は同郷の大先輩で有名な大論客永井柳太郎氏の知遇を受け、影の形に添う如く永井氏に師事して居られたが永井氏が石川県の選挙区で中橋徳五郎と争つて破れそれを機に政界を引退し間もなく他界した。竹田さんはその永井柳太郎氏の衣鉢を継いで同区から衆院戦に出馬し永井氏の弔合戦を旗印に時の政敵中橋派の簪本太吉とゆえつを競つたが目出度く二人共轡を並べてゴールインし茲に初めて輝かしい国会議員として中央進出にふみ出されたのであつた。時に竹田さんは若冠三十八才であつた。以来順風満帆、トントン拍子に頭角を現わし遂に芦田内閣の厚生大臣に就任される迄に大成された。尤より大器よく研鑽を積み重ねあまた險阻な道をも敢えて切り開き、加えて徳運にも恵まれた集大成

の結実である。以上は私の記憶だけのので、足らぬ点、間違ひの点は御寛容あり度い、それは兎も角、こうして二十年に渉る長い政界生活を経て後、再び財界に返り咲き、今度は太平商事株式会社(神鋼商事の前身)の社長に就任して再び大阪に顔を出される事になった。もうこの時は氏も六十五才になつて居られた。東区北浜三丁目の三休橋筋の東南角、今大阪神鋼ビルが建つて居る所に以前

大阪商事があつた。私は推参をも省みず社長室へお伺ひした。すつかり円熟された氏は紺のダブルの服を着てドツカと椅子に体を埋めて居られたが竹田さんを包む斗魂の様な雰囲気、差の甚しいのに忸怩となつた。それでも氏は気軽に昔話の端緒を引き出す様に盛に話題を望まれ、そして、自らも、金子さんとの旧交の復活やら船鉄交換の時に特に水魚の交りを得られた田宮嘉右衛門さんとの再会やらを懐しげに語られた。竹田さんが鈴木商店に在職された期間は決して長いものとは云えない。けれどもその残された業跡は普通人の三倍も五倍もあつたかの様に感じる。氏も亦自分の古巣は鈴木商店だと思つて居られたのであろう人生の大半を燃

焼された政界を去つてからも来る可き処は矢張り鈴木時代に連る職場に姿を御見せになつたのであつた。昭和三十七年、京都の何有荘で辰巳会の全国大会が開催された時、村井順三氏を交えて三人が歓談を交わした時の事は強い印象となつて今もまざまざと私の胸中に生きて居る。生前勲二等旭日重光章を受章されたが、その竹田さんも遂に昨年四月三十日お亡くなりになつた。青山祭場での告別式に参列もしなかつた私は辰巳会供養塔の過去帳に、竹田さんの御名前を謹書する時心からなる合掌と黙禱を捧げた。政府は氏の生前の功勞を嘉して従二位勲一等瑞宝章を追贈した。逝いて尚、余光輝く竹田儀一氏の絢爛たる生涯である。

今度の第五話は、はしなくも辰巳会の二偉人の追憶記になつてしまつた。辰巳会史の傍線として読んで頂ければ幸この上もない。

(四九、六、一五)

ケミカルタンカー

國華産業株式会社

取締役社長 大久保延造

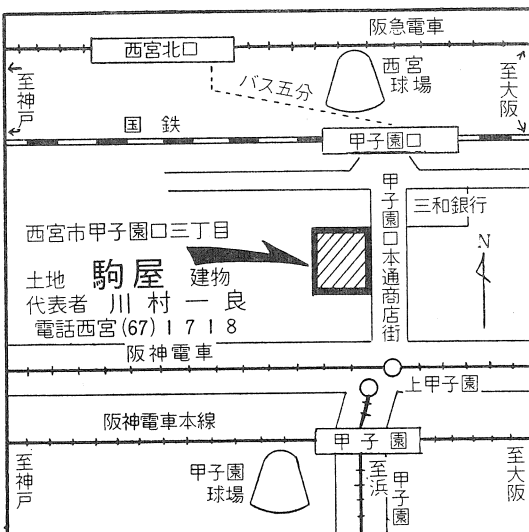
本社 大阪市北区堂島浜通1丁目63番地
TEL (06) 344-5626 (代)
東京事務所 東京都港区芝西久保桜川町28番地
TEL (03) 504-2606



中央毛織株式会社

取締役社長 河野正通

名古屋市中区錦1丁目5番13号(日商岩井ビル)
郵便番号 460-91
電話 (052) 202-3571番



日塩株式会社

東京都千代田区丸ノ内2丁目6-2
電話 東京 03 (281) 3101 (代)

支店 東京 横浜 名古屋 神戸
倉庫 東京 横浜 名古屋 神戸 四日市
出張所 札幌 仙台 金沢 四日市
営業所 横浜本牧埠頭

各社損害保険代理店

三生商会

福原 剛

神戸市生田区元町通3丁目17
(堀川ビル2階)
電話神戸 (331) 5376



東邦金属株式会社

取締役社長 家後修二郎
専務取締役 高畑董幸
大阪市東区北浜3丁目3 (和光証券ビル)
電話大阪 06-202-3376(代)

支店: 東京 工場: 門司・寝屋川
モリブデン・タングステン
電気接点・超硬合金